

# 英国Study Tour

2004.11/13～11/24

2004年11月13日～24日までの11日間、国際文化学部を中心とする山口県立大学の学生9人と岩野雅子先生、国際交流員のVictoria Bentoleyさん、山口日英協会の西村 崇夫さん、山田禎二さんの合計13名で英国スタディーツアーへ旅立った。  
当HPはそのスタディーツアーの報告を目的としたものである。

## 訪問先レポートと写真

11月13日 /14日 /15日 /16日 /17日 /18日 /19日 /20日 /21日 /22日 /23日 /24日

Tourを振り返って

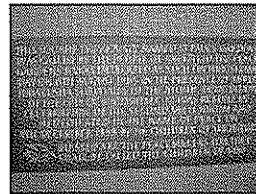
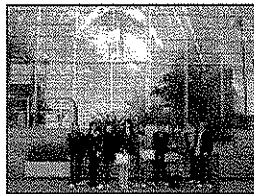
Tour 写真館



山口県立大学 HP  
へ

# 11月14日

昨日ロンドンに到着したばかりだと言うのに、今朝は9時半の電車でシェフィールドへ向かった。地下鉄のKing's cross St. pancras駅では、22ポンドのはずの電車代を17ポンドにまけてもらった。ラッキー☆☆13時、シェフィールドに到着。トラムに乗り換えて、シェフィールドの街を見ながら、今夜私たちが滞在するホテルへと向かった。Peace Gardenでは、ある石碑を見つけた。そこには『歴史上世界で最も悲しい出来事は広島の大原爆であり、これ以上このような悲惨な出来事がないように』というものだった。意外なところで日本との関わりを見つけた。美しい町だが、明るい面だけでなく、暗い過去もあったことを改めて感じた。敵であった日本出身の私たちを、イギリスの人々はどのような目で見ているのだろうか。Winter Gardenでは、世界各国の植物を無料で見ることが出来た。また、この街がかつて鉄鋼業で栄えていたことを忍ばせていた。現在では、鉄鋼業の衰えにより、失業者が増え、社会問題になっているらしい。今回のツアーは学生9名で参加したため、この街に滞在する2日間はシェフィールド大学の学生の家に分らずホームステイする事となった。私は2日間ホームステイする事となった。一軒家を学生4人でシェアしているお宅へお邪魔した。私たち日本の学生と比べると質素な生活をしていた。彼ら男2人、女2人はとても仲が良く、またとなりに住む学生2人も遊びにきており、とてもにぎやかであった。キッシュをごちそうになったり、日本について話したりとても楽しい時間を過ごす事ができた。



TOPA

# 11月15日

今日はシェフィールド大学のツアーの日☆午前は留学センターの方の話を伺った。シェフィールド大学は日本の14の大学と提携しており、1年に約40名の日本人学生を受け入れているという事だった。その後、日本人留学生2名の方にキャンパス内の案内をしてもらった。ジムやプール、図書館などどれを見ても規模は巨大で、その充実さに驚いた。図書館には日本についての本も多々あり、遠く離れたイギリスでも日本のことが知られていて嬉しく思った。留学センターでは、「10分でもいいから毎日勉強を続けること」など英語の重要性について学んだ。IELTSというイギリスに留学するために必要なテストについても知った。日本語の授業も見学し、日本語教育の難しさを知ることとなった。夜は、日本サークルの学生とのイベントが準備されており、パブに行って交流会を行った。イギリスのパブではカウンターで自分の飲みたいお酒をオーダーし、お金を払う。値段的にも安く、現地の学生の会話もはずんだ。日本に来たことのある学生や、日本に留学する予定のある学生など、みななんらかの形で日本と関わりを持っていた。私たちの中には、このような経験をした学生がいた。相手はまだ日本語を勉強し始めて3ヶ月だというのに流暢に日本語を話すか、「あなたはどれくらい英語を勉強しているの？」という質問に対し、答えるのに恥ずかしい思いをしたらしい。皆一人ひとりが、このわずか2、3時間の交流を通して異なった形ではあるが多くの事を学び、良い刺激を受けたに違いない。とても有意義なときを過ごせたと思う。



TOPA

# 11月16日

## ・サットンハウス

サットンハウスとは、\*National Trustという民間団体によって管理・運営されている施設である。サットンハウスは、1535年(日本は室町時代)に東ロンドンで建てられた最も古い家である。この時期は、ヘンリー8世即位の時であり、彼の秘書であったSir Ralph Sadleirがここを建設した。建設当初は、この時代の建築様式のチューダー期建築であった。しかし、その後この家は少年少女の教育の場である、Boys schoolやGirls schoolへと姿を変えたため、ジョージアン期建築やヴィクトリアン期建築の特徴も随所に見られた。持ち主がいろいろな人々に家を貸し出したため、浮浪者たちが一時期集まり一室にはペンキで描かれた落書きがあった。National Trustはこのような状況を食い止めるために、現在のように管理するようになった。窓はチューダー式であるのに、建物を大きく見せるために偽物の窓が描かれており、これはジョージアン式であったりして、様々な時代の建築が混在していた。とても不思議な雰囲気をかもし出す家であったとともに、当時のヨーロッパ建築の移り変わりを実際に目にすることができた。日本は保存だけ行うことが多いが、サットンハウスは保存だけではなく、今もコンサート会場などに使用されていて、イギリスと日本の古き時代の建築物への考え方の違いを感じた。

### \*National Trust

イギリスでは18C後半、産業革命によって開発が進む一方、美しい自然や歴史的環境が壊されていった。これを心配した弁護士のカンパート・ハットン、婦人社会事業家のカスリーン・マッセル、牧師のキャノン・コンズリーらがNational Trustを設立した。100年間で組織は成長し、現在はスタッフ5600人、多くのボランティアで運営されている。この団体は会員制であり、300万人が登録し寄付金を納めている。歴史的建造物や庭園、また海岸線や古城など多くの建物や自然を保存している。



TOPA

NEXT

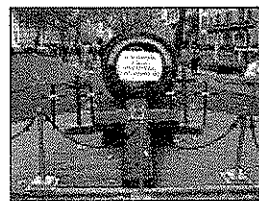
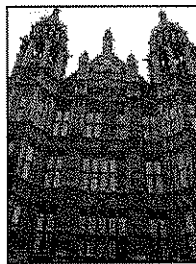
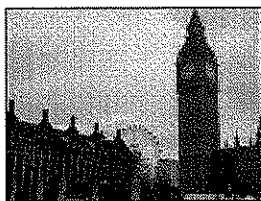
11月17日

## HOUSE OF COMMONSツアー

あの有名なビッグ・ベンの隣にあるイギリスの国会議事堂、HOUSE OF COMMONSの見学に行きました。ここには上院と下院があり、上院の部屋は、金や宝石の美しい装飾がされてありましたが下院の部屋へと続く廊下を進むに従って飾りが少なくなり、昔の身分社会を物語っていました。ちなみに上院は赤、下院は緑がカーペットなど部屋の配色の中心となっていました。ところでイギリスの国会は誰でも傍聴可能です。更に驚くことには議員に意見や申し入れをしたい人は誰でも受付に話の内容を申し出さえすればその議員を呼び出して直接話をさせてもらえるそうです。日本で国会議員に会おうと思えば、当然アポを取らなければならないし、私なんかが行ってもなかなか会ってもらえないと思います。それなのにイギリスはなんて開かれた国なのだろうと思いました。そのことでやはり問題点はたくさんあるようですが、この制度を守っていく方針だそうです。

## ウエストミンスター寺院

この寺院はHOUSE OF COMMONSのすぐ近くにあります。千年以上歴史があり、1066年以来すべての国王の戴冠式が行われています。最近ではダイアナ元皇太子妃の葬儀がおこなわれたことで有名です。ここは以前修道院として使われていたそうです。ここには歴代の王や著名人の墓所ともなっています。なので、至る所に墓があり墓の上には“エフィジー”と呼ばれる墓に入っている人の寝像が横たわっており、不気味な感じがしました。あの有名な女王、エリザベスI世や世界史で習った「カンタベリ物語」のチョーサーの墓も見ることが出来ました。また、ちょうどPoppy Day週間（毎年11月に第一次世界大戦の休戦記念日に赤いポピーの花を胸につけて戦没者を悼む習慣）だったため寺院前の芝生には、たくさんの赤いポピーの造花が飾られていました。



TOPA

NEXT

11月19日

イートン校

イートン校の見学に行きました。ハーロー校と並ぶ全寮制名門男子校で定員1270名。13歳～18歳までの男子が通っています。なんと授業料は1年で400万円くらいかかるそうです。また生徒達はイートニアンと呼ばれています。イートニアン達は皆えんぴ服の制服を着ていて、彼らの登校時間イートンの町は一種異様な雰囲気でした。学校の歴史についての資料館や校内を見学した後、実際に日本語の授業を行っている教室を見せていただきました。そこはまさに日本語一色の部屋でした。まずたくさんの本。日本の伝統文化や生活の本以外になんと日本の中学校の教科書までおいてあり驚きました。また壁には50音表や小学校で習う漢字覚え表、宇多田ヒカルのポスターなんかまで張ってありました。その後日本語を学んでいる学生達と話をしましたが皆日本語が上手でした。それもそのはずイートン校では週に8時間日本語の授業を行っているそうです。ということは1日に2時間日本語を勉強する日もあるということです。さらに宿題をする時間を加えとかなりの時間日本語に関わっていることとなります。私もイートニアンに負けないよう英語を勉強しようと思いましたが！！その後イートン校の食堂で昼食をいただきました。イギリス人でもなかなか入れないイートン校でごはんを食べたことは非常にラッキーなことだそうです。最後にイートン校の図書館を見学しました。この図書館ではなんと指紋で人を識別して本を借りる仕組みが整っていました。その仕組み自体初めて知ったので驚きました。

### ウインザー城

イートン校を見学した後、歩いてウインザー城へ行きました。ちょうどフランスのシラク大統領が訪問していたのでウインザーの町中にフランスとイギリスの国旗が飾られていました。私達が訪れる前日シラク大統領とエリザベス女王が晩餐会を開いていたため、城には女王がいる印の旗が掲げられていました。もちろん女王には会えませんでした。同じ敷地内にいると思うと不思議な感じがしました。城の中で一番印象に残ったのはメアリー女王のドールハウスです。ドールハウスといっても日本のリカちゃんの家のような大きさではなく、幼稚園の子供の身長ほどあるかなり大きなものでした。王族の暮らしをうかがわせるインテリアや調度品が細密なミニチュアで表現されています。なんでも図書館の本はトマス・ハーディー・コナン・ドイルなどの作家の直筆があり、機械類はすべて実際に動かせるそうです。ワインボトルには本物の年代物ワインがはいっており、リネン類にもきちんとイニシャルが刺繍されているという懲りようです。また敷地内にあるセントジョージ礼拝堂は勲章を持つ24の騎士達のバナーが並んでいます。そこには1998年訪英の際に勲章をいただいた平成天皇の菊のご紋も見ることができました。

=引用=

メアリー女王のドールハウス<http://www.sa.jpn.org/~dh/lon>

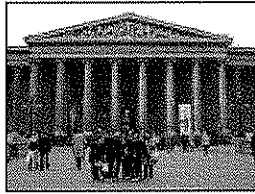
<http://ss5.inet-osaka.or.jp/~kinrans/uk98.htm>



TOPA

11月20日

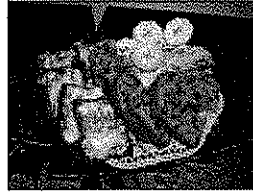
今日の大きなポイントはあの世界最大の規模を誇る大英博物館の訪問と、ケンブリッジへの移動である。ツアーは7日目と言うこともあり、大英博物館へは私たち学生だけでいってみることにした。イギリスの地下鉄は世界で一番簡単と言われるだけあって、とても分かりやすい。大英博物館へも少し遠回りをしてしまったものの、無事にたどり着けることができた。館内はあまりの広さにただ驚くばかりであった。入場料も無料、写真もOK☆教科書に出てくるロゼッタストーンやミイラ、壁画など日本ではまず見ることの出来ない物を見ることが出来た。King's Crossへ戻り、あのハリーポッターで有名となった9と3/4番線を見て、ケンブリッジへ向かった。車窓からちらほら見える残雪が、イギリスの本格的な冬の訪れを思わせた。ケンブリッジの第一印象は静かな田舎町。ロンドンの雑踏とは違ったのどかさにとっても魅かれた。ケンブリッジはトーリの故郷！！今日からトーリは実家に戻ります☆さぞかし嬉しかったことだろう：)



TOPA

11月21日

この日はケンブリッジをベントリーさんの案内でいろいろ見て回った。ケンブリッジ市内大学ツアーといった感じだ。どの建物1つとってもすごく素敵で感動的だった。テレビゲームのなかの建物そのものといった感じだ。お昼に少し自由時間を楽しんだ後、ベントリーさん宅でEnglish afternoon teaを楽しんだ。ベントリーさんの母親がケーキなどを作っていて絶品だった。すごく温かい家族で、家もとてもお洒落。また遊びに行きたい。



TOPA



# 11月22日

・イギリス裁判所 ～Local Justice for Local People by Local People～

私たちは、Cambridge Magistrates' Court(治安判事所)を訪れた。先ず、イギリスの裁判制度について説明を受けた。日本と同様、罪人は国選弁護士を雇える。国の95%の犯罪はMagistrates' Courtで判決が出る。このCourtでは軽犯罪を扱っている。ケンブリッジには海外からの留学生もいるので、彼らもここで裁かれる。

日本との違いは、判事たちはボランティアで働いているということだ。私たちに説明してくださった判事の方の中には、普通は農夫をしておられる方もいた。そして、日本では14歳から罪に問われるのに対し、イギリスでは10歳から罪に問われるということだった。

「日本では、まだまだ子供で罪の重さ、責任を考える能力は無いし、刑務所に入っても悪影響を与えるだけであると考えられているため裁かれない年齢である。しかし、イギリスでは、自分の罪を考えさせるためにもっと更正させる事を重視して10歳と決めているようだ。」(スティーブツアー参加者:宮内さん)

また、罪人が何処で裁判を受けるか決めることができるという。ケンブリッジには大学が多いので、酒の絡んだ暴力事件が多い。他にも、レイプ・ドラッグなど若者によって起こる事件が多いそうだ。

実際に、裁判を傍聴することができた。内容は盗みや家庭内暴力であった。裁判の専門用語が多かったので内容の全てを理解できなかったが、1つ1つの裁判がとてもスピーディーだった。法廷内に判事は3人いて、3人で結論を相談して中央の人しか発言しないというのがイギリスでは決まっていて、これも実際に見る事ができた。日本のように法廷内の判事はスーツや独特な服装ではなく、私服であるなど、とてもラフな感じがした。地域の人が地域の人を裁いているというのが、とてもよく分かった。

TOPA



NEXT

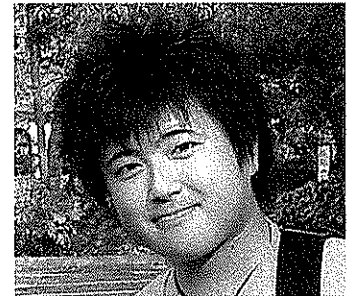
参加者の感想です(画像をクリックしてね☆)



国際交流員  
ヴィクトリア・ベントリーさん



国際文化学部4年  
小山 麻衣子



国際文化学部3年  
大村 悠



国際文化学部2年  
高林 一美



国際文化学部2年  
佐々木 彩



国際文化学部2年  
森 明子



国際文化学部2年  
川端 祐一郎



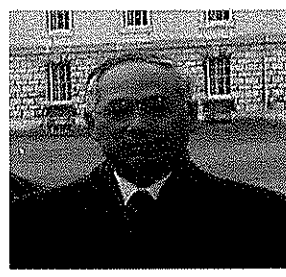
国際文化学部1年  
江頭 加奈子



国際文化学部1年  
吉田 桜子



社会福祉学部1年  
宮内 絵理奈



山口日英協会  
西村 崇夫さん



山口日英協会  
山田 禎二さん

